

まず最初に「タラント」のたとえ全体を引用しておきましょう。

「14 天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。
15 彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。
16 五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。
17 同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。
18 ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。
19 さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。
20 すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』
21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』
22 二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』
23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』
24 ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。
25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』
26 ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。
27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。
28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』
29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。
30 役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて歯ぎしりするのです。』 —マタイ 25:14-30

21 節と 23 節に「わずかな物に忠実だった」という表現がありますが、1 タラント＝

6000 デナリと言われており、1 デナリは1 日分の賃金の値だとされています。

では1 タラントは今日、どれくらいの金額に相当するのでしょうか。

国税庁の民間給与実態統計調査によると、平成 28 年度の給与所得者（サラリーマン）の平均年収は男性 521 万円、女性 280 万円でした。

間を取ると年収 400 万程ほどということです。これは 33.3 万 / 月 1 日の賃金は 1 3 0 0 0 円位となります。

1 タラント = 13000 x 6000 = 7800 万円です。そして2タラントは、1 億 5600 万円、5タラントでは何と 3 億 9000 万にもなります。

5 タラントはもとより 1 タラントの 7800 万でさえ、決して「少なくはない」額の現金を目の当たりにすることはほとんどの人にとって一生の内 まずないであろう金額です。

どう考えても 小さな 僅かな と表現される金額ではありません。

つまり忠実だった「わずかな物」とはタラントのことではないことは確かでしょう。

実際 タラント（金貨）に忠実だった訳ではないでしょう。

預かったものも 儲けた結果も非常に大きなものでしたが、五タラントの奴隷は二タラントの奴隷の2.5倍喜ばれたわけではありません。

あえて同一の表現が繰り返されているように、この両者に対する主人の評価は同一でした。

儲けた金額の問題ではないことが分かります。

では何に忠実だったのでしょうか。

取りも直さずそれは、主人つまり主人の意向に忠実だったわけですが、主人の意向は「商売をする」でした。

しかし幾ら「儲けを出すか」は問題にしておられないということです。

ですから意向は商売を「する」という。言われたとおりに「行おうとする」というただそれこそが主人の評価に繋がっているということでしょう。

ですからその意向は「僅かな、小さな、（ほんの一言の伝達）であり、そういう意味で前者二人はその「僅かなものに」忠実であった。ということでしょう。

そしてこのことから、29節の「だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられる」という「持っているもの」や「持っていないもの」とは何のことなのかも分かります。

「持っているもの」とはすでに考慮したように「主人の意向」に応えたいという気持ちを持ち合わせていたということに他ならないでしょう。

この結論に異論を持たれる方もいるかも知れないので、もう少し説明を加えます。

なんとなく読んでいると、「そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持ってい

る者にやりなさい」という表現などから「持っているもの」とは「タラント」のように思えますが、そのタラントはもともと預かったもので奴隷の所有物ではありませんし、設けた分も含めて全て「主人」のものであります。

実際、1タラント奴隷は「さあどうぞ、これがあなたの物です。」と陳べています。奴隷の誰も「タラント」は所有していません。

「十タラント持っている者」がタラントを所有しているのなら、一タラント奴隷も所有していることとなります。しかし彼は「持たないもの」と評されています。

これらのことから、「持っているもの」「持っていないもの」は「タラント」のことではないと言えます。

そういうわけで一タラント奴隷が微塵も持ち合わせなかったものとは「主人の意向」に応えたいという気持ちであると言えます。

彼はその主人の「明確な意向」にさえ、指一本動かそうとしなかったのですから、当然奴隷失格です。

解雇されて当然でしょう。

主人は不当にあるいは過大な要求をしていたわけではないのは「おのおのその能力に応じて」と記されていることから分かります。奴隷たちに当然のそして「わずかな期待」をかける主人を「手厳しい親方」と考え「恐怖を感じていた」というのです。

ここには信頼関係も、本来の主従関係も存在しません。

端的に言えば、忠実さとは結局、主人の期待を自分の意向とし、その喜びのために自分も一肌脱ぐという気概のあるなしが問われているということでしょう。

ところで、この譬えについての様々な解説を見ますと、例外なく『この「タラント」は現実には何を指し示しているか』という論議が出てきます。

ネット等で検索してみましたが、ほとんどの共通した解釈は「タラント＝タレント」であり神から与えられた賜物、能力や才能のことであるとされています。

タラントが何を表すかなどということは、譬えの目的から言えばほとんどどうでも良いことなのですが、(それに特定の意味があるなら、そのように語られるはず)明らかに間違い、勘違いであることが、通説のように言われていることは正しておこうかと思えます。

タラントは託されたもので、キリストの財産であり、奴隷各人の生まれながらの才能などではありません。

それが何を指しているかをあえて言うなら、主人が奴隷に委ねた高価な値のもの、それは適用として考えればキリストが弟子たち(クリスチャン)に期待したこと、あるいは委ねたも

のは「福音」に他なりませんし、「商売」とは福音を分かち合う努力を払うことに違いはないでしょう。

「あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。」— I ペテロ 3:15

つまり、キリストに信仰を働かせる理由、動機づけ、福音に関わる豊富な知識、などを、各人の持てるものに応じて託され、またそれを他者に対して伝え、説得する「努力を惜しまない」態度によって、キリストの財産ともいうべき、メシヤとして地上に来られて果たすべき業の成果を増し加えることに尽力した人々は、勤勉な奴隷として、キリストの喜びに入れられにふさわしいであろうし、それにほとんど関心も示さず、「自分にできることは何か」という発想を自ら起草し「一肌脱ぐ」（クリスチャン的自己犠牲）という感覚を持ち得ない「ご利益主義」な人が、かろうじて「触らぬ神に祟（たたり）なし」に似た、自分なりに考えた精一杯の対処法が「これが地中に隠すという努力を惜しまずに、盗まれないように守って来たあなたのタラントです。」と差し出しさえすれば、これで万事 OK と思ったのでしょうか。

しかし、それは大きな誤算でした。

多少でも「持っていた」のにそれさえも「取り去られる」ことになります。

これは、マタイ 13 章の「種を蒔く人」の喩えとリンクしているといつて良いでしょう。

「また、別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。

しかし、日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。

また、別の種はいばらの中に落ちたが、いばらが伸びて、ふさいでしまった。

別の種は良い地に落ちて、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結んだ。

「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません。

というのは、持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまうからです。わたしが彼らにたとえて話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしないからです。

-マタイ 13:5-8;11-13

ここに、「天の王国」に関連して喩えその他で多く語られている、エッセンスというか真髄
というか神とキリストの価値観、センスが浮かび上がって来ます。

「タラント」が何を表しているかをあえて表現するならば、それは福音に関する知識、認識、

共有というようなものと考えられます。

つまりそれは、キリストにとって、是が非でも人々に得させたいと願われた最重要な、知識と熱情など、人類救出の神の手立てに関する霊的な富であり、「更に多くのもの」とは天の王国に招かれてキリストともに王また祭司として貴重な立場を与えられるということに他ならないでしょう。

類似のたとえの「ミナ」の方では、「十の町を支配する者」「五つの町を治めなさい」と表現されていてそれが「支配権」に関係していることが分かります。

ならばその各人に託された財産とは、それに匹敵するもので、まだ地上にいる間に委ねられ得るもの、たとえば地の塩、夜の光としての立場というか身分というか、クリスチャンならではの独特な特惠(特別の恩恵。特別の待遇)のようなものを指していると言えるでしょう。わかりやすく言えば、福音の知識、それを分かつためのノウハウ、喜び、是認の充足感、平安、幸福感、神と共に働くものであるという一体感などです。

ですから五、ニタラント奴隷の「持っていたもの」とは次の聖句に示されているような精神と言えるでしょう。

「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。

つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。

ですから、神がわたしたちを通して勤めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。」

-II コリント 5:18-20

そしてこの福音に関係した業は「忠実さ」と関連付けられています。

「そして、多くの証人の前でわたしから聞いたことを、ほかの人々にも教えることのできる忠実な人たちにゆだねなさい。」-II テモテ 2:2

「祝福に満ちた神の栄光の福音に一致しており、わたしはその福音をゆだねられています。わたしを強くしてくださった、わたしたちの主キリスト・イエスに感謝しています。この方が、わたしを忠実な者と見なして務めに就かせてくださったからです。」-I テモテ 1:11-12

1 タラント奴隷が持っていなかったもの— それは次の聖句に示されるようなクリスチャンとしての精神でしょう。

「わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。」 - ローマ 1:16

「わたしたちは神に認められ、福音をゆだねられているからこそ、このように語っています。人に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を吟味される神に喜んでいただくためです。」 I テサロニケ 2:4

わたしたちはあなたがたをいとおしく思っていたので、神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願ったほどです。あなたがたはわたしたちにとって愛する者となったからです。」 - I テサロニケ 2:4,8

さてここで、よく関連して比較される「ミナの譬え話」も併せて考慮して見ましょう。少し長いですが、その部分をすべて引用して置きましょう。

「11 人々がこれらのことに耳を傾けているとき、イエスは、続けて一つのたとえを話された。それは、イエスがエルサレムに近づいておられ、そのため人々は神の国がすぐにでも現われるように思っていたからである。

12 それで、イエスはこう言われた。「ある身分の高い人が、遠い国に行った。王位を受けて帰るためであった。

13 彼は自分の十人のしもべを呼んで、十ミナを与え、彼らに言った。『私が帰るまで、これで商売しなさい。』

14 しかし、その国民たちは、彼を憎んでいたので、あとから使いをやり、『この人に、私たちの王にはなってもらいたくありません。』と言った。

15 さて、彼が王位を受けて帰って来たとき、金を与えておいたしもべたちがどんな商売をしたかを知ろうと思い、彼らを呼び出すように言いつけた。

16 さて、最初の者が現われて言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、十ミナをもうけました。』

17 主人は彼に言った。『よくやった。良いしもべだ。あなたはほんの小さな事にも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい。』

18 二番目の者が来て言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、五ミナをもうけました。』

19 主人はこの者にも言った。『あなたも五つの町を治めなさい。』

20 もうひとりが来て言った。『ご主人さま。さあ、ここにあなたの一ミナがございます。私はふるしきに包んでしまっておきました。

21 あなたは計算の細かい、きびしい方ですから、恐ろしゅうございました。あなたはお預けにならなかったものをも取り立て、お蒔きにならなかったものをも刈り取る方ですから。』

22 主人はそのしもべに言った。『悪いしもべだ。私はあなたのことばによって、あなたをさ

ばこう。あなたは、私が預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取るきびしい人間だと知っていた、というのか。

23 だったら、なぜ私の金を銀行に預けておかなかったのか。そうすれば私は帰って来たときに、それを利息といっしょに受け取れたはずだ。』

24 そして、そばに立っていた者たちに言った。『その一ミナを彼から取り上げて、十ミナ持っている人にやりなさい。』

25 すると彼らは、『ご主人さま。その人は十ミナも持っています。』と言った。

26 彼は言った。『あなたがたに言うが、だれでも持っている者は、さらに与えられ、持たない者からは、持っている者までも取り上げられるのです。

27 ただ、私が王になるのを望まなかったこの敵どもは、みなここに連れて来て、私の目の前で殺してしまえ。』」 ー ルカ 19:11-27

「神の国」が今やたちどころに現れると人々が思っていたゆえに、その考え改めるべく語られた喩えです。

話の目的から言って、神の国の「王位」を得るのはまだ先のことであることを銘記させると共に、それまでただ漫然と過ごすのではなく、委ねられ、期待されていることがあるということを示しておられるということでしょう。

タラントとミナの例え話は共通点はあるものの結論が違っているため、まったく別のものとして扱われているというのが一般的な解説です。

しかし、たとえの要点、目的は同じで、バリエーションの違いは、あくまで話としては架空のもので、奴隷の人数が3人と10人の違い、各人への額が5, 2, 1, や1ミナ均等の違いなど、細かいことは他の物に置き換え可能なもので、さほど重要なものではないということです。

つまりタラントでもミナでも、そしておそらくドラクマでも、良い訳で、目の付けどころはそこじゃないよと教えていると言っても良いでしょう。

肝心なのは、タラントでもミナの話しても、神の国が到来するまで、相当な期間が有り、それまで「商売をする」ことが期待され、帰ったとき精算がなされると言うことを肝に銘じるということです。

「奴隷」を自認する、つまりクリスチャンとなるという個々のケースで言えば、たとえ委ねられたのが、西暦1世紀だったとしても、精算は再臨時、終末期の大患難の後です。

王になることを望まない人々（敵）の言動と、しもべたちの商売がどう関係しているのか、描かれていません。

しかし、同時進行するこの2つの出来事は「神の国」に関連した同じタイミングの結末、王位を得てその支配を開始する時の重要な出来事、つまり「裁きの執行」がはっきりと描かれています。

キリストの弟子を自認する人々の裁きと、王に敵対する者への報復です。

その「敵」に対する表現をみますと、単に「滅びる」というものではなく、「みなここに連れて来て、私の目の前で殺してしまえ」となっており、かなり過激です。

「私が王として支配することを望まぬ、あの私の敵どもをここに引き出せ、そして奴らを私の面前で斬り殺せ」。岩波訳

わたしを王に戴くことを好まなかったあの敵どもをここに引っ張ってきて、わたしの見ている前で斬り殺してしまえ。」塚本訳

わざわざ、「ここ」に連れてきて「私の目の前」でとなっていることから、「ここ」というのはおそらく「シオンの山」のことでしょう。

「わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。」詩篇 2:6

「ここに連れてくる」というのは、ハルマゲドンと呼ばれる場所に王たち集めたという聖句にリンクしていると考えられます。

「なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。

地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者にと逆らう。『さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう。』」詩篇 2:1-3

そしてキリストの「見ている前で斬り殺」される場面に直面すると記されています。

「あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。」詩篇 2:9

タラントとミナの例えを合わせて考慮すると、終末期にキリストに関わる三様のグループが浮かび上がって来ます。

精算の日に分離される2種類の奴隷「主人の喜びに入る人々」「解雇される人々」

そして「首をはねられて殺される人々」これらの人はどうあってもキリストの王権を認めようとせず、死ぬまで逆らい続ける人々です。

持っていたものさえすべて取り上げられる奴隷（おそらく解雇される）は、「敵」ではなく「斬り殺される」グループとは別扱いです。それは、門前払いをくらう愚かな女たち、泣いて歯ぎしりする悪い奴隷たちと同一で、退けられますが滅ぼされるわけではありません。

このことから、滅びに通じる広い門を通過して入ったクリスチャンは、天の王国から閉め出されますが、命が絶たれるというものではないことが確証されます。

この点に関する詳細は、「128「滅び」は絶滅ではなく「取り消し」であるという聖書的根拠」という記事を御覧ください。